Best Human ISHIKAWA
ベストヒューマン石川
ドクター編 59

高齢社会のQOLを守る眼科医療
世界レベルの診療と研究に邁進

金沢大学附属病院眼科は、あらゆる眼科疾患に対応する体制を整え、先進的診療と研究、医師の育成に注力し、「最高水準」を見据えてきました。緑内障診療で名立たる杉山和久教授に、金沢大学眼科の実績と展望をお話しいただきます。

金沢大学医学系長・医学類長
金沢大学眼科教授・診療科長
杉山 和久（すぎやま かずひさ）氏

1984年　金沢大学医学部卒業、岐阜大学眼科学教室入局
1990年　米国オレゴン医科大学眼科およびDevers Eye Institute留学
1996年　岐阜大学眼科講師
2000年　岐阜大学眼科助教授
2002年　金沢大学医薬保健学域医学系眼科学教授
2020年　金沢大学医学系長・医学類長

あらゆる眼科疾患を診る北陸における眼科の中枢

眼科学教室が創設されたのは明治17年（1884）、約140年の歴史があります。教室の基礎は、高安病の発見で知られる三代目教授の高安右人（たかやすみきと）先生が築かれました。私が九代目に就任したのは平成14年（2002）、以来、伝統ある教室を発展させるべく励んできました。今年で節目の20年目を迎えます。

当院眼科には、緑内障や白内障を始め、角膜、網膜、眼腫瘍、眼瞼、斜視、小児眼科の専門医が揃っており、すべての眼科疾患を診ることができます。北陸における眼科医療の最後の砦として、北陸3県はもとより長野、新潟、滋賀からの紹介患者さんも受け入れてきました。また、当科から医師を派遣している関連病院は32カ所を数え、同門のメンバーも200名を超えました。新しい臨床研修医制度が導入された時期、入局者が減ったこともありましたが、最近は増えています。高齢化社会において、いくつになっても良好なQOLを保つには、良好な視機能が欠かせません。眼科の重要性は今後一層高まっていくと私は見ています。

緑内障医療の第一人者として

私は研修医の頃から緑内障を専門とし、37年におよびます。緑内障は視神経が障害されて視野が徐々に狭くなる疾患で、いまなお、中途失明原因の第1位です。40代では20人に1人、70代ともなれば10人に1人が罹り、潜在患者数はとても多い。というのは、悪化するまで自覚症状がほとんどないからです。

原因別に大別すると、原因不明の原発性、二次的原因のある続発性、先天性の3つがあり、原発性の緑内障は慢性型と急性型に分かれます。慢性型も、眼圧が正常なタイプと眼圧が高いタイプがあり、ひと口に緑内障と言ってもたいへん種類が多いのです。

視神経は一度損傷されると回復できないため、緑内障を完治することはできません。進行を緩やかにする、または止める療法として点眼薬、レーザー、手術があり、多くは点眼薬を用います。点眼薬治療がうまく行かない場合や失明リスクが高い場合は手術を適用します。手術は、房水の排出を促して眼圧を下げることを狙いとしており、新しい排出孔を開く、流出路を再建する、また、最新のものでは人工チューブで流出路をつくるなど、様々な術式があります。当科では年間500件ほどの緑内障手術を行っており、この件数は全国有数だと思います。

緑内障診療の目指すところは失明ゼロであり、私たちは研究にも精力的に取り組んでいます。臨床研究では、診療データを利用し、新たな診断法や治療の開発に向けて他大学や病院と共同で、また、海外の大学との共同で研究を進めています。一方、基礎研究では、ラットやマウスを使い、OCTとよばれる光干渉断層計で眼底の組織や特殊な血液測定器で血流を観察し、緑内障の病態解明を試みています。

三ルールを基礎に。照準は世界レベル

若手には、どこへ出しても引けを取らない良医、一流の眼科医になってほしい。そういう思いで教育を重視してきました。ひと通り眼科の各専門分野（緑内障・角膜など）を学んだ上で、得意とする分野を2つは身に付けられるように勉強する。そうした指導を行っています。

また、医局は明るく楽しい、アットホームなところにしたい。なおかつ、厳しさもなくてはならない、が持論です。教室運営には3つの心得を掲げています。一つめは、和の精神。教室員は互いに思いやり、協調性を持って事にあたるように。二つめ、教室は道場。医員は競い合うことも必要。互いに切磋琢磨するように。三つめ、医師は教育者。自分の持つ知識や技術はすべて後輩に授けるよう努め、人に教えることで自分の知識の確認もできる。知識の習得と伝授を脈々と続けていくように。このような姿勢で一同、研鑽を積んでいます。

当科は、国際学会への参加、最新機器の導入、先進的手術の取り入れを積極的に行い、最高水準の医療を実践してきたという自負があります。国内はもとより世界最高水準の医療を目指したい。そういう強い意志をもって今後も、臨床、研究、教育を進めていくつもりです。

角膜、結膜、虹彩、水晶体などのさまざまな疾患を診断できる細隙灯顕微鏡検査